

小説を読む——国木田独歩「泣き笑い」

コトバ表現研究所 渡辺 知明

時之助の母親は女中お光の帰るのを一刻千秋の思で待つて居る。

女「又彼の愚鈍のことだから、のろくさのろくさして居るのだろう。」

真実に仕様がなないねえ。」と大焦燥に焦燥て居る。

するとお光は果たして頗る暢気に、鼻歌でも唄わんばかりの様子

で帰つて来た。母親には見受けられたのである。いきなり

女「お光！ お光！ お前何をぐずぐずして居るのだねえ。真実に！」

女「へえ」と年は十七ばかりの、孤児なるが故に可哀そうだと、東京

から連れ帰つた女中が、目をパチクリパチクリ、奥様の顔を眺めて居

る。

女「へえもないもんだ、それで片山の武さんは帰つて居ましたか。」

女「へえ、片山の坊様は帰つて居ました。」

女「そんなら大村の坊様は？」

女「帰つて居ました。」

母親は急込んで、

女「そんなら我家の坊様は如何したか、尋ねましたか。」

女「へえ。」

女「へえじゃありません、真実にお前のような大馬鹿がありますか。

我家の坊様の事を聞かないくらいなら、お使に行つて何の役にたち

ます。」

女「でも奥様が只だ片山の坊様と大村の坊様が帰つたか聞いて来いと仰有いましたから、それで……」

女「そう言いましたとも。けれど何故我家の坊様は一言訊くことが出来ません」と白眼けて、直ぐ奥に向いて、

女「真実に貴方心配ですから、御自分で一寸聞いて来て下さいませんか。」

女「闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親は、又た悠然たるものである。団扇をパタリパタリ、

父「まあ、お前のようにワイワイ騒いだつて仕様がなないよ。必定寄道で

もしたのだから、今に帰つて来るよ。」

女「貴方そんな暢気な事ばかりおっしゃつて、万一の事があつたら、

如何なさいます。」

女「万一の事とはどんな事だ。」

女「万一のこととは万一の事です。」

女「我家の事が水へでも陥つたというのだろう。」

女「そうですね。そんな事が無いとも限りません。連伴が少年のこ

とですから驚いて逃げて来て、知らん顔して居るなんて、よく東京

でもあるじゃありませんか。」

女「そんな馬鹿々々しいことがあつて堪るものかね。第一お前は時等

が釣魚に行く場所の模様を知らないから、そういうことを言うのだ。

今日、時が釣に往つた処は平地で池の堤というものが無い。だから落

ちようがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこまず位のもので、

決して生命に彼はある筈がないのだ。必定寄道を為て居るのだよ。」

といわれて、乙なことをおっしゃると言いたそうな身構えをして東京の奥様、

母「堤があるかないか去年来たばかりの私にはお国の事は存じませんが、もしか貴様が断つて寄道を為したのだとおぼしめすなら、一寸聞いて来て頂くわけに参りませんか知ら。片山の坊様でも我家の時間が寄道を為したのか池に陥ったのか位は知って居なさる筈ですから」と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平気なもの、

父「お前が心配するのだからお前が聞きに行けば可いじゃアないか。」

母「行きますとも、そんなら私が行きます。」

女「あれ奥様、私が参ります。」

女「いいえ、私が行きます。お前などに頼むと安心が出来ません。」

女「いいえ、私が参ります。」

父「うるさいね、兩人で行ったら可いだろう」と父の一声。

母親とお光は申しあわしたように黙つて了つた。そしてこそこそ兩人は外方へ出掛けた。

母「お光や。お前は片山へ行って聞いておいで。私は此処で待つて居るから。時は平時この道から帰るから。」

と言われて、家から四町ばかりの淋しい辻に奥様を残してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙霧をこめて蓮池の香り高き処に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が帰つて来て、

女「奥様、矢張坊ちゃんは居残りなんだそうです。」

「一人でかえ。」

「へえ。」

母「まア、何という兒だろう。田舎道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても帰つて来ないなんて……」

女「今にお帰りになりますよ」とお光は奥様の泣き出しそうな声を聞いて慰める。奥様は無言で蓮池と屋敷との間を通う真直な道を眺めて居たが、

母「お前へお帰り、そして風呂の下を見てお置き。私は少し此処で待つて見るから。」

女「畏まりました」とお光の去つた後で、母親は「若しか」という場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待つて居ると、間もなく蓮池の縁に小さな影が見えだした。だんだん近づいて来るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒かも知れぬと心

も空に見つめていると釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小声で唱歌を歌いながら来るのは正しく時之助である。

母「時じゃアありませんか」という一刹那、悲み変じて喜びとなる。

母「いやあ、母様其処で何を為て居るのです。」

母「まア此兒は、何を為て居る所じやありません。お前こそ斯んなに遅くまで何をして居たのです。」という時に、喜び變じて怒となる。

母「釣つて居ました。今日は沢山釣れましたよ。」

母「最早これから決して釣魚にはやりません。」

母「何故？」

母「何故もないもんです。さっさとお帰りなさい。」

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平気なもの。口笛を吹

母「何故もありません。さっさとお帰りなさい。」

母「何故？」

母「何故もないもんです。さっさとお帰りなさい。」

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平気なもの。口笛を吹

「一人でかえ。」

3/12/10

きながら続く。

流石に何程か心配になっていたと見えて、父親は玄関先に立つて

居たが、二人の姿の門内に現るるや、

父「帰った、帰った！」と、ここにこする。

母「まあ貴方如何でしょう。居残つて釣つて居たのですとサ。呆れた見

じやアありませんか。」

父「時、お前が余まり遅いので母様大変心配しましたぞ。」と父親か

ら言われても、それには答えず、

子「今日は沢山釣れましたよ。今見せます」と言い捨てて裏へ回り、井

戸端で足を洗つて、魚籠を提げたまま座敷へ入り、洋燈の下で魚籠

の蓋を取り、

子「そら、こんなに釣れました。」

父「どれどれ」と父親は覗込んで、

「成程、これはお前にしては大漁だ」と感心する。

子「随分大きな居ますよ。見せましょう」と台所へ飛んで行き、

子「光、摺鉢をお呉れ。」

お光は摺鉢を渡しながら、

中「大変遅うございましてことねえ。」

子「黙れ！」と摺鉢を奪取り、座敷に飛んで帰つて、魚籠をあけると、

大小四五十尾の鮒が銀光を放つて、ぞろぞろと出て来る。

子「ねえ、父上此魚など随分大きいでしょう。」

父「なる程これは大きい。」

母「何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて来て。真実に人に

心配ばかりかけて！」

と先程から父親が優しく言う程、劫腹が立つて居た母親は我鳴り

つける。

子「ほウだ」と時之助は嬉しそうに鮒を眺めながらいう。

母「なにが『ほウ』です」と母親は睨みつける。

子「だつて母上の国じやアこれが五尾か十尾でも、日本帝国では四十

九尾ですからね。」

母「百尾でも五尾でも其様ものは同じことです、生意氣を言う。」

子「でも此奴のような大きい鮒は母上見たことが無いでしょう」と鮒の

尾を掴んでぶらさげて見せる。

母「何が大きいものか。鼻へ捻り込みそうなのが何になります。」

子「ほウだ。」

母「何が『ほウ』です。」

子「だつて母上の鼻の穴は随分大きい穴ですなえ。」

母「何故です。」

子「だつて此鮒が鼻へ捻り込まれるのですもの。」

と平気だというのを聞いて、父親は思わずくすくすと笑つた。

母「まあ此兒は、此兒は」と母親は口惜しいので泣くのか、可笑しいの

で笑うのか、目には涙、口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

(明治四十年三月)

### 国木田独歩の作品一覧

作品は『武蔵野』(1901年3月、民友社)、『独歩集』(1902年7月、近事画報社)、『運命』(1903年3月、佐久良書房)、『濤声』(1904年5月、彩雲閣)、『独歩集第二』(1905年7月、彩雲閣)、『渚』(1905年11月、彩雲閣)の6短編集に収められている。

\*

\* 愛弟通信(1894年10月21日 - 95年3月12日、『国民新聞』)

\* 源叔父(1897年8月、『文芸倶楽部』)

\* 武蔵野(1898年1月 - 2月、『国民之友』)※発表時は「今の武蔵野」

\* 忘れえぬ人々(1898年4月、『国民之友』)

\* 死(1898年6月、『国民之友』)

\* 二少女(1898年7月、『国民之友』)

\* 河霧(1898年8月、『国民之友』)

\* 鹿狩(1898年8月、『家庭雑誌』)

\* 遺言(1900年8月、『太平洋』)

\* 郊外(1900年10月、『太陽』)

\* 初恋(1900年10月、『太平洋』)

\* 置土産(1900年12月、『太陽』)

\* 小春(1900年12月、『中学世界』)

\* 初孫(1900年12月、『太平洋』)

\* 帰去来(1901年5月、『新小説』)

\* 牛肉と馬鈴薯(1901年11月、『小天地』)

\* 巡査(1902年2月、『小柴舟』)

\* 湯ヶ島より(1902年6月、『山比古』)

\* 非凡人(1902年6月、『太平洋』)

\* 富岡先生(1902年7月、『教育界』)

\* 少年の悲哀(1902年7月、『小天地』)

\* 鎌倉夫人(1902年10 - 11月、『太平洋』)

\* 酒中日記(1902年11月、『文芸界』)

\* 運命論者(1903年3月、『山比古』)

\* 正直者(1903年10月、『新著文芸』)

\* 女難(1903年12月、『文芸界』)

\* 春の鳥(1904年、『女学世界』)

\* 渚(1907年12月、『文章世界』)

\* 竹の木戸(1908年1月、『中央公論』)

\* 二老人(1908年1月、『文章世界』)